

気候変動対策にもなる

## 植物食のすすめ

近藤美樹子



### C O P 26 が終わって

人類は今、異常気象や環境破壊をもたらす気候変動という存亡の機に直面しています。イギリスに産業革命が起こり、それがヨーロッパに広がり工業化が進んだ18世紀中ごろから人類の消費するエネルギー量が急激に増え続けました。その結果、それまで陸域や海洋などの自然が吸収・保持することで相殺されバランスを保ってきた二酸化炭素などの温室効果ガスがどんどん大気中にあふ

れ、このままでは近い将来人類が地球に住めなくなる、というところまで来てしまいました。現在すでに地表の温度は産業革命前より1・09℃の上昇、このうち1・07℃が人間活動に起因するものです。(注1)

この問題に対処するため、昨年11月イギリスのグラスゴーでC O P 26 (第26回国連気候変動枠組条約締約国会議)が開かれました。それに先立つ2015年のC O P 21で採択された「パリ協定」の「産業革命前からの気温上昇を2℃未満、できれば1・5℃に抑える」から一歩

踏み込んで「・・・気温上昇を1.5℃に抑える」と目標を引き上げた点が評価されましたが、排出削減のために参加各国が自国で行う取り組みとして考えた計画を合わせてもこの目標達成にほど遠い状況です。「1.5℃に抑える」ためには、今世紀後半までに「温室効果ガス排出量実質ゼロ（ネットゼロ）」すなわち自然などに吸収され相殺される分を差し引いて排出量をゼロにしなくてはならないのですが、会議の最後にまとめられた「成果文書」は石炭火力について土壇場になって何度も文言を弱める形で修正され、当初の「石炭火力の段階的廃止を加速する」から最終的に「石炭火力の段階的削減に向けた努力を加速する」というまわりくどい逃げ道を残した表現になる残念な結果に終わりました。つまるところ、地球の環境をこれ以上悪化させないためには気温の上昇をどうしても抑えなければならぬが、その実現は非常に難しい、ということの表れだと思います。

今回の会議では重要課題として「石炭火力の廃止」「電気自動車への転換」「森林の保護」「発展途上国への

資金援助」という四つのテーマが挙げられていますが、これらだけで達成できないのであれば、少しでも排出削減に貢献できることを探して取り組んでいく必要があるのではないのでしょうか。

CO<sub>2</sub> 26では「メタン」についても議論され、日本を含めた有志国により「世界のメタン排出を2030年までに30%削減する」という合意がなされました。メタンは温室効果ガスの一つですが、排出量は二酸化炭素に次いで二番目に多く、単位重量当たりの温室効果は二酸化炭素の25倍もあり、今後メタンの排出を削減することが、効果的に地球温暖化を抑制するためにも極めて重要だと考えられています。メタンの発生には、湿原・湖沼などから放出される自然発生源によるもの他、化石燃料の採掘や牛のゲップ、ごみの埋め立て処分場からの発生など人間活動によるものがあります。メタンの排出量が増加し始めた直近10年間（2008-2017年）を見ると、人間活動によるものが60%と半分以上を占め、自然発生源による排出量がそれ以前と比べて変わらない

のに対し、人間活動による排出量だけが増加しています。(注2)

本稿ではこの点に着目し、世界全体が植物食を目指す可能性について考えたいと思います。

## 畜産業から出る温室効果ガス

畜産業に起因する温室効果ガス排出量は世界の総排出量の約15%を占めますが、そのうちの半分以上が牛に関する排出、さらにその牛の排出の半分以上がゲップ(消化管発酵)で出るメタンです。食肉生産に関して、牛肉のほうが豚肉より温室効果ガスの排出量が2〜4倍も多くなるのはこのメタンの排出によるところが大きいのです。また牛には肉牛だけでなく乳牛もいるので、肉を食べなくても牛乳やチーズ、ヨーグルトなどの乳製品を摂るだけでメタンの排出に寄与していることになります。牛肉生産や酪農の盛んなアメリカやヨーロッパではこの畜産由来のメタンの排出が特に多くなっています。

日本では外国ほど畜産が盛んではないかわりに主食であるコメを栽培する水田からのメタンの発生が多いのですが、それでも食肉生産と比べれば単位重量当たりの排出量は食肉生産のほうが圧倒的に多く、豚肉ではコメの3〜4倍、牛肉では10倍以上になります。(注3)

また牛のゲップによるメタン排出を除くと、食肉生産の温室効果ガス排出量は国産の場合、豚肉も牛肉も飼料の生産と輸送からが30%、糞尿処理からが50%を占めています。飼料は残飯などを流用すれば食品ロスの解消にもつながるのですが、そうではなく、早く効率よく育てるためトウモロコシや小麦などの穀物を米国などから輸入するので輸送の際の船の燃料や飼料生産の際の化学肥料の使用が排出の原因となっています。また糞尿の処理では温室効果ガスの一つである亜酸化窒素(温室効果は二酸化炭素の300倍)が多く排出されます。(注4)

ついでに畜産以外も見てみると、水産品の魚類では排出量のほとんどが漁船の燃料によるもので、輸入や養殖の場合は、輸送や施設等からの排出量が上乘せされま

す。これは農産物も同様で、野菜や果物のハウス栽培のものには施設の加温による排出が多くなっています。(注3)

今はトマトやキュウリ、ナス、ピーマンなど市場に一年中出回っていますが、これらは夏野菜なので時季外れの冬に食べるにはハウスで栽培する必要があります。しかし旬の時期にとれるものより栄養価も劣り、マクロビオティック(注5)などの陰陽の考え方から見ても体を冷やす陰性のこれらの野菜を寒い時期にとることは本来好ましくありません。つまり「地産地消」(地域で生産されたものをその地域で消費すること)、「身土不二」(自分の住む土地で生産されたものを食べるのが一番体に合っている)の言葉通り、地元で露地栽培された旬のものを食べるのが体にも環境のためにもいいのです。イチゴを七五三やクリスマスマスのケーキに載せることや、ハウスミカンで始めから甘いミカンを味わうことが本当に必要でしょうか。青い酸味のあるミカンからだんだん黄色く甘くなるのを楽しむ方が季節感を感じられると思いませんか。

## 国連の目指す「健康的な食事」は植物食

そこで考えたのですが、もし世界中の人がみんな肉食をやめて自然農法による植物食に転換したら、温室効果ガスの排出量が減り気候変動対策に大きく貢献できるのではないのでしょうか。

はじめ、肉食の習慣がそれほど長くない日本ならいざ知らず、欧米人に植物食に転換してもらおうというのはあまりに荒唐無稽かとも思いましたが、調べてみると世界はどうかやらの方向へ動き出しているようなのです。

昨年7月に開かれた国連食料システムサミットに關し農林水産省がまとめた報告(注6)によると、現在、世界人口の約1割に当たる約8億人が飢餓状態にあり、そのうちの7億人をアジアとアフリカが占めているそうです。また、世界人口の半数近い30億人以上が貧困のため健康的な食事をとることができません。食事と一口に言ってもその質は様々ですが、質・量両面にわたる食料安全保障の観点から国連では食事を次の3つに分類して

います。

① 「エネルギーが十分な食事」・・・必要なカロリーを満たす炭水化物中心の食事

② 「栄養素が十分な食事」・・・十分なカロリーに加え、コメ、肉、野菜などで必要な栄養素をバランスよく摂れる食事

③ 「健康的な食事」・・・十分なカロリーと栄養素だけでなく、より多様な品目をバランスよく摂取でききる食事

その上で、健康で肥満や病気等の問題が起きないように③の食事をとれるよう議論が進んでいます。ここで言う③の健康的な食事とは以下のような要素を含む植物中心の食事です。

- ・ 一日当たり400g以上の果実と野菜
- ・ マメ科植物、ナッツ類、全粒穀物
- ・ 一日当たり平均2000〜2500 kcalのエネルギー摂取
- ・ 糖類からのエネルギー摂取量10%未満

・ 脂肪分からのエネルギー摂取量30%未満、飽和脂肪酸からは10%未満、トランス脂肪酸からは1%未満

・ 一日当たりのヨード添加塩<sup>(注7)</sup>の摂取量5g未満

現状ではこのような「健康的な食事」は①の食事比べ5倍も高くつくため貧しい人々に行き渡らず、多くが肥満や慢性疾患に苦しんでいます。しかし畜産をやめれば飼料を生産する代わりに作物を栽培して家畜の何倍もの人を養うことができます。現在世界で飼育されている食用の家畜は牛・豚・羊などの大型のものが約50億頭、鶏は200億羽以上もいるのです。さらに現在生産された食料の3分の1が廃棄されているという「食品ロス」をなくせば、飢餓の問題も解決に導くことが可能です。

一方、温室効果ガスの排出という観点から見ても、人類が今後現在の食事パターンからペスカタリアン（肉なし、魚あり）やベジタリアン（肉魚なし、卵・乳製品あり）に変われば2030年には約50%の排出削減、さらにビーガン（肉魚なし、卵・乳製品なしの100%植物ベースの食生活）に変われば74%の排出削減になる、と

試算しています。飢餓がなくなり健康になり、喫緊の気候変動の問題にも大きく貢献できるのです。

## 植物食は欧米のほうが進んでいる

世界は確実にこの方向へ向かっています。しかも欧米のほうが日本よりずっと進んでいる気がします。

本誌に毎号掲載されている加藤明さんの論考に大いに触発され、私は現在ほぼビーガンになりましたが、初めて玄米に出会ったのは留学先のドイツでのことでした。

それまで私のまわりには家族も含め玄米食や自然食品など気にする人は誰もおらず玄米も見たこともなかったのですが、ドイツのスーパーの棚には500g入りの小さなパックですが白米と一緒に玄米も並べられています。音楽大学に留学したのでまわりは若い音大生ばかり、一般のドイツ人とは嗜好が違ふということもありますが、自然のもの、有機栽培のものを好む人が多く、私もその影響を受けて玄米を食べ始めました。小さな町で

したが、無農薬のものを扱う自然食品店もありました。今思えば、ドイツの主食のライ麦パンには全粒粉を用いたいろいろな雑穀やナッツ類が入ったものが多く、オートミール（燕麥）にドライフルーツやナッツを加え牛乳をかけて食べるミューズリーという食品にも全粒のものがありました。もともと穀類を全粒で食べる習慣があったのでお米も玄米で売っていたのかもしれませんが。また帰国後に鎌倉で知り合ったボストンから合気道の修行に來ていたアメリカ人たちは、ボストンですでに玄米正食（マクロビオティック）を実践していて、私もマクロビオティックについて少し学び、玄米正食をしました。さらに、勤務していたドイツ語の学校の同僚のドイツ人女性が動物保護の活動をしており厳格なビーガンだったので、彼女からも植物食についていろいろ教わりました。このように私の場合は完全に欧米から植物食を学んだのですが、彼らが肉食をやめたきっかけの多くは、「同じ命である動物を殺して食べるのはかわいそう」というものでした。たとえばドイツでは、私と同世代でも地方

の出身なら、家で飼っている鶏を家庭の主婦が絞めて食卓に載せるということが普通に行われていたらしく、お皿の上のお肉がどこから来たか子供でも分かっています。しかし日本では牛や豚がどのように加工されたのか（と殺され切り刻まれたのか）意識しないままきれいにパック詰めされた肉をスーパーで買ってきて調理するため、尊い命を犠牲にしているという罪の意識がわきにくくということがあると思います。

したがって、欧米人が肉食をやめるということは不可能ではないと思うのです。むしろ日本人のほうがそれを見做って追隨していくことになるのかもしれない。実際、フランスではすでに、2年間の試験導入を終えて、昨年9月から学校給食の献立を少なくとも週1回肉・魚なしのベジタリアン・メニューにすることが法律で義務付けられました。フランス、ヨーロッパといっても白人ばかりでなく移民や難民など雑多な人種が混ざっており、宗教も食生活も千差万別で必ずしも肉食中心の人たちばかりではないので、ベジタリアン・メニューの

需要がかなり多いということも背景としてあると思います。またドイツは現在では全人口の1割がビーガンまたはベジタリアンと言われるほど菜食化が進んでおり、首都ベルリンにある4つの大学では昨年10月から学食とカフェテリアで肉類の提供をほぼ取りやめ、68%がビーガンの、28%がベジタリアンのメニューになっているということです。このような動きはヨーロッパに広がりつつあります。

ところで、植物食が注目され始めて市場に出てきたものに「代替肉」というものがあります。市場に出回ったのは外国のほうがずっと早かったようですが、ようやく日本でも「大豆ミート」と呼ばれてスーパーでも入手できるようになりました。植物食を実践するとタンパク質を大豆が小麦のグルテンからとることにし、私のように料理のレパートリーが少ないといつも同じようなものを食べることになるのが悩みの種ですが、肉に見た目も食感も似せて作られた大豆ミートはその点、肉に置き換えることで使える便利な商品のようです。もっともビー

ガンの人、とくに動物も同じ大切な命と考える立場からすれば、何でわざわざ肉に似せて作る必要があるのか、ということになります。肉食から転換する人の導入としては一つの方法かもしれませんが、実はこれまでも小麦のグルテンから作った「セイタン」と呼ばれる「グルテンミート」がありました。こちらは主に肉食主義の人たちが使い、自然食品店でしか扱っておらず一般には普及しませんでした。「大豆ミート」が一般の人向けに売られているのは、これから植物食の時代がやってくる、ということの証なのかもしれません。

何事もその行為自体よりも何故そうするのかという動機が大事だと思ふので、植物食への転換も、動物の命もかけがえない尊いものというワンネスの観点から行ふならば本当はそれが一番いいとは思いますが、まずとにかく植物食に変えてみる、というのもこの際やってみる価値があるのでないでしょうか。温室効果ガス排出削減や飢餓の解消に貢献するというのも一つの立派な動機と言えるとと思います。さらに、食生活が変わることで肉

や精神が改善され、ワンネスの心が芽生えやすくなる、という可能性もあるのですから。

世界で一丸となつて、植物食への転換を目指そうではありませんか。

## むすび

今回、C O P 26について調べてみるまで、私は気候変動問題についてそれほど真剣に向き合っていませんでした。何十年後に影響が出てくるくらいにしか考えていなかったのです。しかし事態は一刻の猶予もないところまで来ていることを知り愕然とし、世界で起きていることを他人事のように捉えていたこれまでの無責任な生き方を大いに反省しました。確かに日本をはじめ先進国の多くが位置する北半球の中・高緯度地域ではすぐに致命的な影響が出ないのかもしれませんが。C O P 26に集まつた先進各国の代表が自国の利益を第一に考え、思い切つた政策に二の足を踏んでいたのもそれが原因のように思



えました。でも考えてみてください。もし自分の足元が海に沈み始めているなら、お尻に火がついているなら、何をおいても必死になつて温度上昇を食い止めるための措置をとるはずです。今、有効な対策を取らなければ地球全体がだめになり、人間が住めない星になるのです。先進国も発展途上国もありません。洪水や干ばつ、森林火災などすでに大きな被害が出ている低緯度に住む人たちに思いを馳せてみてください。想像力を持ちましょう。そして一人一人が自分に何ができるか考え、実行していきましよう。

〈注および参考文献〉

1. 「IPCC (国連気候変動に関する政府間パネル) 第6次評価報告書」 2021年8月
2. 「日本国温室効果ガスインベントリ報告書2021年」 国立環境研究所
3. 「日本の主要食糧消費における温室効果ガス排出のライフサイクル分析とその削減ポテンシャルの評価」 立命館

大学 吉川直樹・天野耕二・島田幸司

4. 「バカにできない？ 肉の生産で出る温室効果ガス」 東京新聞ウェブサイト 2020年7月28日
5. マクロバイオティクとは、伝統的な玄米菜食を<sup>せきくろく</sup>桜沢<sup>ゆきか</sup>如一が陰陽の理論を用いて発展させた哲学体系。例えば食物には陰性と陽性があり、住んでいる地域、季節、その人の気質などに応じてなるべく中庸になるような食物をとることが理想とされる。彼は欧米にもこの考えを普及させ「ヨージ・オーサワ」として知られている。
6. 「国連食料システムサミット2021 - 世界で議論されていること -」 農林水産省 令和3年4月
7. ヨード (ヨウ素) 添加塩とは、ヨードが含まれている食用の塩。世界で20億人が影響を受けているといわれる知的発達遅れの原因となるヨード欠乏症を防ぐことができる。日本人はヨウ素を含む海藻をよく食べるので問題にならないが、外国では一般に食卓塩として「ヨウ素添加食塩」を使っている。

# 宮沢賢治の理想とした食と職（第二部）

翻訳・著述家（ヴァイガン）

加藤明

前号「サムライ・平和」第18号の「第一部 賢治の生涯」に続いて、第二部をお届け致します。賢治に影響を与えたと思われる組織名・人物名・書籍名、また、賢治が執筆した童話や詩の題名、教典類からの引用文、その他の重要語句などは、太字にしてあります。

## 第二部 賢治の悟り

### 〈法華経への帰依と不殺生戒の遵守〉

賢治は農学校の教師時代、生徒たちに、「人間は何故生まれてきたか、ということを知らなければならない

めに、この世に生まれてきたのです。そしてこの問題を本気になって考えるか考えぬかによって、その人の生存価値が決定すると思います」と述べた、と伝えられます。賢治自身、人生の目的とは何か、自分の天命とは何かを「本気になって考え」、求道に明け暮れる毎日でしたが、若い日に読んだ法華経の感動が薄れることはありませんでした。むしろ、日に日に、その価値は大きくなり、やがて、賢治にとつて、すべてとなりました。そして賢治は、臨終の床でも、「私の全生涯の仕事はこの経をあなたのお手許に届けることでした」と、法華経（より厳密には、法華経に記された真理）を伝えることが、自分の生涯を掛けた仕事であった、と明言したのであり

ます。確かに、賢治が法華經の精神を生きようとしてい  
なかつたら、私たちの知る賢治は、なかつたでありま  
しょう。

賢治は、今にも燃え尽きんとする病床の中で、「病の  
ゆゑにもくちん いのちなり みのりに棄てば うれ  
しからまし」と詠みましたが、この場合の「みのり」に  
は、「稲の実り」と「御法みの（特に法華經の教える仏法）」  
という、二重の意味が込められています。「自分は病ゆ  
えに今にも朽ちゆかんとする身なれども、花巻地方は今  
年豊作だったと伝え聞く。私の今生の活動が、いささか  
でもその実りに役立つとしたら嬉しいことだ。また、  
仏法を弘める手助けができたとしたら本望なことだ」。  
賢治の、棄て身の「生き様よすが」と残された作品群、その  
「みのり」から溢こぼれた種は、今尚、繁殖しつつあり、  
人々の心を潤し続けています。

『妙法蓮華經』(略して『法華經』)の原典はサンスク

リット語であります。鳩摩羅什くまらじゆ(344-413年現  
新疆ウイグル自治区クチャ市出身)の漢訳したものが、  
六世紀、聖徳太子の時代に日本に伝来しました。その  
後、太子が法華經の解説書である『法華義疏ほつげしよ』を著した  
ことや、日本の天台宗開祖である最澄が法華經の写経を  
勧めたことよって、またさらに、空海も最晩年に法  
華經の講釈に力を入れ、最後の書物となった『法華經  
釈』を書き残したことよって、国中に広く普及す  
るようになりました。時を経て、鎌倉時代の日蓮が、  
1253年4月28日、朝日に向かい「南無妙法蓮華經」  
と題目を唱えて法華宗(日蓮宗)を開始したことによ  
って、法華經はいっそう広く日本中に浸透してゆくこと  
になりました。

『法華經』は28品ほん(もしくは「ぼん」章と同意)から  
なる、「諸經の王」と呼ばれるお経で、その中には、觀  
音經として有名な觀世音菩薩普門品、如來壽量品、常  
不輕菩薩品などの品があり、「三車火宅」(譬喩品)、

「長者窮子」(信解品)、「衣裏繫珠」(五百弟子受記品)などの、よく知られた譬え話が含まれています。

賢治は、18歳の時に法華経を読んで感動し、その後は折々に日蓮の著書にも目を通していたようですが、やがて、現役であった田中智学の法華経解釈や活動に共鳴するようになり、24歳で、智学が創始した「国柱会」の会員信徒となりました。一時、組織の活動に献身しようと上京したりもしましたが、結局、「法華文学ノ創作」を自己の本分と感じるようになったようで、生涯、会員で在り続けましたが、組織活動からは身を引き、文芸を通して、法華経の宇宙観・生命観を伝えようと試みしました。賢治は実際、童話や詩の執筆によつて、また更には、自身の生き方そのものによつて、国柱会の組織人として働いた場合以上に、遥かに多くの老若男女に、法華経の神髄を正しく伝えることができたのではないのでしょうか。

さて、賢治は、日蓮宗の一派であった国柱会の門徒と

なりましたが、入会直後の頃は、父の政次郎や、親友であった保阪嘉内や、花巻農学校で同僚であった堀籠文之進<sup>いん</sup>に対して、時折り、日蓮宗の伝統である、強制的に改宗を迫る、「破折屈伏<sup>はしやくくつぷく</sup>」(略して「折伏<sup>しやくふく</sup>」)というような態度にでたこともあったようです。しかしながら、いつまでもそれに固執することはありませんでした。賢治の法華経理解が深まるに連れ、結局のところ、この経の中心思想である万教一元・生命一元の真理に至り、そこから必然、宇宙まで広がる博愛精神が培われるようになってきたものと思われまふ。山は、どの方向から登ろうとも、頂上に達すれば、皆一同に会するのであります。頂上を極めれば(神髄を把握すれば)、登山口(法門)に拘<sup>こたわ</sup>ることはなくなります。賢治は法華経という登山道を登りつめて、ついに生命の何たるかを知悉<sup>ちしつ</sup>したのではないのでしょうか。以上のことから、賢治が最後の最後まで法華経の弘法<sup>くわうぼう</sup>に固執していたとしても、それが、一日蓮宗への勧誘<sup>くわんすい</sup>というような、狭い動機から為されたものでないことは、明らかであります。

ちなみに、法華經をよくよく読んでみれば、この法門でなければ救われまいとして、視野狭窄の極みである他宗排撃や折伏をよしとするようなことは、どこにも書かれていないのであります。むしろ、「我、常に衆生の、道を行じ、道を行ぜざるを知って、度すべき所に随つて、為に種々の法を説く（常ながら、道に適つた行いの出来る人もいれば出来ない人もいるので、私は、人それぞれ濟度できるところに従つて、種々の教えを説いている）」（如来寿量品）と釈尊自ら言明し、「樂つて人及び經典の過を説かざれ。亦、諸余の法師を輕慢せざれ。但大乘を以つて為に解説して、一切種智を得しめよ（容易に人や教典の過ちを指摘し咎めてはならない。また、他宗派の法師を輕蔑してはならない。ただ、一切の人は等しく如来であるという、大乘の真理だけを説いて、悟りに入らしめよ）」（安樂行品）と戒めているのであります。

大慈大悲の經典である法華經にしてみれば、いい迷惑であります、その法華經の宗教であるはずの日蓮宗

が、折伏という強引な布教法と結びついて排他的な印象を持つに至った、そもその原因は、法華經の卓越性に感動し熱中する余り、「真言亡国、禪天魔、念仏無間、律国賊」などと言って、独善的に強圧的に急進的に自宗の布教を目指した、日蓮の性格と言動に由来しているのであります。ただし、現在の日蓮は、自門に拘らない寛容な人物となつていようです。

また、「南無妙法蓮華經」と、法華經に帰依する旨の、「題目」を唱える「唱題」を始めたのも、日蓮でありました。「声字即実相」であり、尊い名号を唱える功德は皆無ではありませんが、如来寿量品の示すような実相を会得し、生命の法則・愛の法則に準拠した生活を送らない限りは、たとえ数多く唱題したからといって、悟りの深まることはありません。

では、賢治の人生と作品に充溢した法華經の神髄とは何なのでしょう？ 法華經のどの品も、必要あつて挿入されているのであり、大切ではありませんが、特に重要

と思われるのは、如来寿量品、常不輕菩薩品、觀世音菩薩普門品の三品であります。如来寿量品には、「実相としての我と宇宙（久遠本仏）」が記され、上述の万教一元・生命一元の真理などが明言されています。常不輕菩薩品には、その「実相を顕現する生き方（菩薩行道）」が記されています。また、觀世音菩薩普門品には、人が菩薩行に努める際に伴う、「法則的加護の働き」が記されているのであります。

如来寿量品は、釈尊（ゴータマ・シツダルタ）が、時空や生死を超越した、万物と一体の、本仏（Buddha）霊我・神我・真我・大我・実相我」としての最高境地を述べたものであり、その言わんとするところは、「実相においては、私自身が久遠不滅の仏（神）であり、完全円満・永遠無限の存在である。森羅万象の一切は、仏（神）である私の生命・慈悲（愛）の顕現なのである」ということであります。これは法華經に記されたゴータマ仏陀に限らず、真の求道者であるなら必ず最終的に

き着くところの、究極的な神人合一境であって、この心境を会得することが無上の悟り（無上等正覚）であり、この悟りを生きることが究極の仏道であります。これは、イエスが「父とわたしとは一つである」「アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのである」と言われた時の、キリストとしての境地と、同じことを述べたものであり、ゴータマやイエス同様、私たち一人一人が、この心境へと進化してゆくべきものなのであります。

ブツダ（覚醒した者）もキリスト（油注がれた者）も、個人の名前ではなく、「覚者（実相の体現者）」を表す尊称であって、人は誰でも、魂のうちに、仏性・キリスト性という、覚者へと成長し得る霊的種子を宿しています。

さて、賢治も感動し度々瞑想したと思われる如来寿量品の文言は、次の部分であります。「衆生劫尽きて、大火に焼かると見る時も、我が此の土は安穩にして、天人常に充滿せり。園林諸の堂閣、種々の宝をもつて莊嚴し、宝樹華果多くして、衆生の遊樂する所なり。諸天天

鼓を打ちて、常に衆の妓楽を作し、曼陀羅華を雨らして  
仏及び大衆に散す。我が浄土は毀れざるに、而も衆は  
焼け尽きて憂怖諸の苦惱、是の如き悉く充滿せりと見  
る。是の諸の罪の衆生は悪業の因縁を以て、阿僧祇劫を  
過ぐれども 三宝の名を聞かず。諸の有ゆる功德を修し  
柔和質直なる者は、則ち皆我が身、此にあつて法を説く  
と見る。(人々が、この世が終わりを迎え種々の大災害  
が起こる、と思つているときでも、私の国土は安らか  
で、いつも天人が満ちている。花園や宮殿は、種々の  
寶石で飾られ、美しい花やおいしい果実をつけた多くの  
木々があり、人々はそれらを楽しんでゐる。天人たちは  
天の楽器を鳴らし、常に種々の音楽を演奏し、マンダ  
ラの花が、仏や人々の上に降り注いでゐる。私の国土は  
不滅であるのに、人々はこの国土の終わりが迫つて、あ  
らゆる苦しみや悩みに溢れてゐると錯覚してゐる。罪を  
重ねてきた人々は、悪い行為の結果、どんなに長い時が  
過ぎてても、仏・法・僧の名を聞くことができないが、善  
い行為をなし、心が柔和で素直な人々は、皆、私がここ

で、説法しつつあるのを見ることが出来る)」。)

これが、宇宙の実相、生命の実相であります。実相世  
界は、生きとし生けるものの和樂した世界であつて、そ  
こには、如何なる災害も病も欠乏も不調和も流血も存在  
しません。食物としてあるのは果物だけで、あらゆる衆  
生が、澄み切つた明るい和やかな光の中で、讚歎感謝の  
心で慈しみあつてゐるのであります。これは未来の理想  
ではなく、実相世界に今、現成してゐる状態なのです。  
この現前成就してゐる和樂の世界を見ることが能わず、こ  
れを現実化出来ないのは、人が殺生・搾取を繰り返して  
いるために他ならないのであります。

この文言の終わりの方に「罪を重ねてきた人々は、悪  
い行為の結果、どんな長い時が過ぎてても、三宝(仏・  
法・僧)の名を聞くことができないが、善い行為をな  
し、心が柔和で素直な人々は、皆、私がここで、説法し  
つつあるのを見ることが出来る」とありますが、これ  
は、人が仏(覺者)・法(その教え)・僧(その仲間)に